

|               |    |
|---------------|----|
| 問題・解答<br>用紙番号 | 21 |
|---------------|----|

の解答用紙に解答しなさい。

国

語

〈受験学部・学科〉

**3科目型 受験者**

法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、  
理工学部(住環境デザイン学科・建築学科・都市環境工学科)、  
農学部【文系科目型】(食農ビジネス学科)

**2科目型 受験者**

法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、  
看護学部、農学部(食農ビジネス学科)

問題は一〇〇点満点で作成しています。

**I**

次の1～5の傍線部のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。(一〇点)

- 1 ほとぼりが冷めるまでシチヨウする。
- 2 一時危なかったが、今はシヨウコウ状態を保っている。
- 3 二十年来の疑問がヒヨウカイした。
- 4 摂南大学のエンカクを調べる。
- 5 カンキエウをつけた話し方をする。

## II

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(四五点)

私には、八月一五日という日が、なぜか一年の真ん中だという気がする。真夏の中心、一年のエネルギーの頂上、その正午に昭和天皇はラジオで、戦争が終わったことを告げる。そのことによって、「戦後」という、全く違う時間が開始される。

そのラジオ放送の前には、永久に続くと思われた戦争で、もうすぐ死ぬはずだった自分に、天皇のラジオ放送によって生が与えられる。自分のだけでなく、女性であれば兵士である父の、夫の、息子の、家族の、友人の、恋人の死が生が変わる。終戦の詔勅を聞いて、私の母もふくめ、多くの妻が思ったことは夫が帰ってくるかもしれない、という期待だったと聞く。それまでの四年近い年月の中で、戦場においても、本土においても、その苦烈さを、実際にであれ見聞であれ知っていた日本人は、戦争は敗北でしか終わらないのではないかと考えてはいても、それが実際にどのようなやつて来るのかは、想像の域外のことであった。それは、情報を入手し得てうすうす感づいていた者にも、ほとんど青天の霹靂のような感慨を与えたようだ。

天皇による真夏の正午のラジオ放送は、まさに「生の福昔」であった。この肉声による放送によって、奇妙なことに、「戦争を始めた天皇」が「戦争を終わらせた天皇」に一変する。命を奪うはずの天皇が生をもたらすのだ。天皇の戦争を始めた「責任」は、戦争を終わらせた「功績」に取って代わられる。そして同時に、ラジオを聞いた一人一人の戦争に対する「責任」も、日本人以外のアジア人に起きたことがらも、同時に真夏の空気の中に蒸発したかのような効果をもたらす。この八月一五日を境に前後、二つの日本、二種類の日本人が出現する。では、大転換のトリックはどこにあるのだろうか。

天皇のこのラジオ放送に関しては、よく、戦争に「敗れた」と言っていないことが、敗戦をこまかすレトリックとして指摘されている。この詔書にも「時局ヲ收拾」とあって「敗北」の語は使われていない。たしかに、そのとおりなのだ。しかし、日清戦争と日露戦争に勝ったときも、文中には、「戦勝(捷)」という語がそれぞれ一回、あとは「勝」っておこるなど戒める文章の中に一回、出てくるだけである。勝ったときも案外、(ー)である。それは対外的な意味もあつたろうが、大げさな言葉づかいをしながら、ほかすところはほかす、というのはトリックではなく、詔勅の基本レトリックなのである。

しかし、まさにその終戦の詔書に見られるレトリック、文章における論理のずらし方には注意すべきものがある。そこでは、戦いは不利であり、敵はますます残虐さを加え、このまま続けると日本民族も人類文明も滅びてしまう、ここで、人類のためにも「時局ヲ收拾」し、「将来ノ建設」のために新たな苦難の道を歩もう、そうでないと、「世界ノ進運」に遅れてしまう、とそう書かれて

いるのだ。「日本の敗北」は「世界の破滅」という高次の課題に置き換わっている。しかし、問題は、この文章のずらしがいかにか巧妙であれ、疲れきって、敵を殺しもしたが、身近な者や肉親を殺されてもいた人々が、なぜ、いまさらそんなま<sup>2</sup>やがしに聞く耳を持ったかという点である。ここにトリックといってもよい、ある仕掛けがあつてこそ、八月一五日以前の日本とそれ以降の日本という、どう見ても百八十度方向の違う二つの世界が、ほんの一日という細いのりしろでつながるのだ。

この放送が素晴らしい効果を持ったのは、まず第一に、<sup>B</sup>ラジオを通してであれ、それが天皇の肉声であつたこと、<sup>C</sup>第二に、呼びかけが「爾<sup>なご</sup>臣民」であつたこと、この二点が重要である。

八月一五日以前に天皇の肉声を聞くような日本人はほんのわずかであつた。それは、政治家、軍人、官吏のトップのものに限られていた。つまり勅任官、その中でも親任官という大臣や枢密顧問官、大将といった天皇の周りを固めていた、国家システムの中枢部の人たちだけであつた。それがこのラジオ放送では、天皇は録音とはいえ肉声によつて、一挙に何千万という一般の人たちに向かつて語りかけたのである。その「玉音」がどんなに、奇妙な声で聞き取れなかったとしても、いや、むしろ整った声より、その異様なすり切れた祝詞<sup>のりこと</sup>のような声の方が、まず「つかみ」となり、心に食い込む力を増したかもしれない。天皇の放送の後に、じつは、アナウンサーが詔書を要約、解説をしたという事実があるのだが、終戦の詔勅のラジオ放送に関する人々の「思い出話」に、私はそのことを読んだことも聞いたこともない。天皇の肉声に昂<sup>うき</sup>奮<sup>ふん</sup>して、次のアナウンサーの声などどうでもよかったのではないだろうか。ルーズベルトやヒトラーには大分遅れたが、日本では、この天皇によるラジオ放送が、メディアを高次に使いこなした歴史上最初のプロパガンダだったと言えよう。

次に重要なのは、肉声で語りかけたのが「爾臣民」であつたことだ。明治以来の詔書や勅語では、語りかける相手は「忠良の臣」であつたりもするのだが、一般の日本人である場合は、多く、「汝有衆<sup>なご</sup>」か、「爾臣民」が使われる。「有衆」は語義としては、臣民と似た意味の、国の民ということである。しかし、この二つは使われ方の上で違いが見える。たとえば、関東大震災直後の人々への励ましの詔書や皇紀二千六百年を祝う詔書では、「爾臣民」となっている。明治の教育勅語などでも「爾臣民」が使われている。一方、日清・日露の宣戦と終結の講和では「汝有衆」が使われている。そして、一九四一年一二月八日の対英米への宣戦でも「汝有衆」が使われている。ところが、その戦争が敗戦に終わったときには「爾臣民」と呼びかけているのだ。

つまり、一般の日本人に、震災で大変だねとか、こういうことに努力しなさいといった、やや「親しみ」をこめた、一歩近づいたアプローチをする場合は、「爾臣民」を使い、戦争が始まったから、みんな精一杯頑張るように、というときは「汝有衆」が使われていると読める。そうしたことが過去にあつて、そのうえで、この終戦の詔書は「爾臣民」となっているのだ。詔書が成すことは、ただ負けた、という報<sup>し</sup>せだけでは足りなかったのだ。敗戦を納得させて武器を捨てさせなければなら

らない。しかし、あまり「敗」戦に氣落ちし過ぎないようにしなければならない。国家建設にやる気を起こさせなければならない。そこで、関東大震災の災害時と同じく、明治国家建設の教育勅語と同様に、「爾臣民」と呼びかける必要があった、私はそう考える。

加えて、この詔書で目立つことの一つに、民族の滅亡と人類文明の破却があれば皇祖高宗の靈にどうやって謝ればいいのか、というくだりがある。家を潰<sup>つぶ</sup>したら先祖に申し訳ない、は分かるが、人類の文明を破壊したら先祖にというのは、おかしい。いや、おかしいというよりは、むしろ、前段に人類を置くことで、後段の家の先祖に謝ることを私事にせず公事にしているレトリックであると考えられる。それほど、昭和天皇は、天皇家のその時点での継承者として、自分のところでこの家を潰してはいけないという意識を非常に強く持っていたと思われる。そのためにも、天皇が中心の「国体」に対し革命など起こさせないように、天皇のもとに引きつけて、国家建設に奮い立たせようという、二重の目的を持つ、みことなプロパガンダであった。

そして、この呼びかけがラジオを通して行われた、ということは画期的であった。臣民の英語における対応語の **subject** とはもともと、絶対的な主権のもとに服従する民のことである。ただし、王には一方的な服従の位置に置かれながらも、臣民のあいだには平等性が確保される。ところが、明治憲法下の日本人には、明らかに国家にとつての存在の軽重から来る「国家階級制」とでも呼ぶべきものがあつた。「臣民」といつても、それが中国の儒学にあつた二つの語「臣」と「民」の、日本における合成であるように、天皇を中心とする同心円上の構造の中で、一般の日本人は、先に述べた天皇を取り巻く人たち、「臣」である「一級臣民」に対して、「民」である「二級の臣民」として外側の円環の中にいたのだ。その二級の人々が突然、ラジオによる「玉音」で、臣を飛び越えて「爾臣民」と呼びかけられ、「無<sup>む</sup>事<sup>じ</sup>（の民）」として「殺傷」、「惨害」を受けていることを天皇に同情されたのだ。ここに、二級の臣民は敗戦によつて、初めて天皇と直接つながる「臣民」となり、<sup>D</sup>逆説的に、天皇制は存亡の危機を迎えたときに、初めて日本人すべてを **subject**（臣民）とする体制を取ることができたのだ。

『敗北を抱きしめて』は、そのラジオ放送を聞いた後の日本人が、敗北をどう受け止め、民主主義をどのように受け入れていったかを描く。ダワーは、日本人は敗北に絶望することも逆上することもなく、「平和と民主主義という理想は、日本に根をおろした」。しかし、その理想は「しばしば不協和音を奏でる様々な声となつて現れ出た」と書く。このことは日本人を臣民（**subject**）というモデルでとらえるときにはよく分かる。**subject** という言葉は、その存在のありようが持っている、王から何かしてもらふことで自分たちの安全と繁栄を図るという、受け身的な態度がその内容である。その受け身的なところが、「平和と民主主義的な理想」が根づいた理由だということになるだろう。

しかし、**subject**（臣民）とは、絶対王政下の人々のことである。「民主主義下の臣民」というあ

り方とは、原理的に不協和音が生まれざるを得ないのだ。ではなぜ、民主主義が現実というよりは理想のかたちで上からおろされてきたときに、この臣民であることと、主体的に自分たちの社会の政策を決定していく民主主義的原理とのあいだの、原理的不協和音が亀裂とならなかったのであろうか。ここには、その亀裂に政治運動の槌子<sup>てこ</sup>を入れて社会の改変を図る「左翼」の勢力に対して、昭和天皇のなりふり構わぬ（ ii ）の働きがある。具体的には八月一五日のラジオ放送から始まる、一連の、天皇からの臣民へのアプローチである。

まず、一九四六年一月一日に、天皇は俗に「人間宣言」といわれる詔書を発する。それはすぐに新聞に載り、人々は天皇は現人神<sup>あらひとがみ</sup>にあらず、と知らされる。正確には、それを天皇が認めたという事実を知ることとなる。天皇は、彼と臣民の結びつきは「単ナル神話伝説トニ依<sup>よ</sup>」るものではない、信頼と敬愛に基づき、と、やや一方的にそれも性急に人々に迫ってくる。こうした詔書の起草が、天皇の周りのさまざまな人々や政治組織の思惑から出て来たとしても、非常事態に、直接日本人にアプローチしようとした天皇の意図と、彼の政治に関する勘の鋭さがうかがえる。この詔書の最後は「朕ノ信頼スル国民」と締めくくられる。まだ民主憲法以前の明治憲法下なのに「国民」――

そして、天皇による巡幸が日本中――といっても沖縄は除かれているが――で行われる。じつはこれは彼にとっては二度目の全国ツアーの体験である。最初は大正天皇の摂政の時代に、このときは沖縄をふくむ全国の道府県、台湾、樺太まで回っている。そのことは彼の心の中で、皇太子時代の英国訪問のときに見た、英国王室と国民との距離の近さがモデルとなっていたに違いない。むしろ天皇になってからそうしたことは気軽にはできず、与えられた「神格化」された役割は彼自身不満であつたかもしれない。ラジオ放送から、人間宣言、全国巡幸、これは昭和天皇にとっては自らの思想の実践活動であつた。臣民・民主主義の本質的不協和音が亀裂とはならずに来た理由の一つとして、天皇の側からのこうした働きかけがあつたのだ。

（船曳建夫『「日本人論」再考』）

\* 『敗北を抱きしめて』…アメリカ合衆国の日本史研究者、ジヨン・ダウーの著書。敗戦後の日本人の姿を描く。

問一 点線部 1・2 の本文中における言葉の意味として最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

1 青天の霹靂

2 まやかし

ア 思いがけない出来事

ア あいまいなこと

イ 時代を変える出来事

イ ごまかすこと

ウ 悲しい知らせ

ウ 根拠のないこと

エ うれしい知らせ

エ 非現実的なこと

問二 空欄 ( i ) ・ ( ii ) に当てはまる最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

i ア 厳格

ii ア 海千山千

イ 謙虚

イ 獅子奮迅

ウ 尊大

ウ 我田引水

エ 寛容

エ 電光石火

問三 傍線部 A 「昭和天皇はラジオで、戦争が終わったことを告げる」とあるが、天皇のラジオ放

送に対する筆者の見解について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 戦争を終わらせた天皇の功績を強調して、戦争を始めた天皇の責任を問えなくしている。

イ 「敗北」の語を用いないことで、国民には戦争に負けたと感じさせないようにしている。

ウ 日本の敗北を世界の破滅という課題に置き換えることで、論理をずらしている。

エ 表現をばかすことで、日本が有利な戦局で戦争を終わらせるかのように見せている。

オ 戦争に行った家族が帰ってくるかもしれないという、期待を抱かせようとしている。



問四 傍線部B「ラジオを通してであれ、それが天皇の肉声であったこと」とあるが、天皇のラジオ放送が肉声であったことについて述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 天皇が周りを固める中枢部の者たちの反対を押し切って肉声で語りかけたことは、多くの国民の感動を呼ぶこととなった。
- イ ラジオを通して聞く天皇の肉声は異様な感でほとんど聞き取ることができなかつたため、直後にアナウンサーが解説を加えた。
- ウ 天皇は、自分の代でこの家を潰してはいけないという意識を非常に強く持っていたために、肉声で訴えかける必要があつた。
- エ 天皇の肉声は思いも寄らない親しみのある声であつたために、国民は安らぎを感じて終戦を受け入れることができた。
- オ 天皇が肉声により一挙に何千万人に語りかけたことは、メディアを巧みに利用したプロパガンダと言えるものであつた。

問五 傍線部C「呼びかけが「爾臣民」であつたこと」とあるが、天皇のラジオ放送の呼びかけが「爾臣民」であつたことについて述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア それまで天皇が一般人に直接語りかける際には「汝有衆」が用いられていたが、新しい時代にふさわしい表現として「爾臣民」が用いられた。
- イ 天皇が国民に寄り添いねぎらう気持ちを表現するために、難解で堅苦しい「汝有衆」よりも理解しやすい「爾臣民」が用いられた。
- ウ 開戦時に国民を奮い立たせるために用いた「汝有衆」を、敗戦の詔書で用いることがためらわれたので「爾臣民」が用いられた。
- エ 関東大震災や教育勅語の時と同様に、国家建設に向けて気持ちを奮い立たせるために親しみのある「爾臣民」が用いられた。
- オ 天皇が中心の「国体」に対して革命など起こさせないように、絶対的な王権に服従する意味を含ませた「爾臣民」が用いられた。

問六 傍線部D「逆説的に、天皇制は存亡の危機を迎えたときに、初めて日本人すべてを subject (臣民) とする体制を取ることができた」とはどういうことか。次の空欄 

|   |
|---|
| X |
|---|

 に入るように本文中の言葉を用いて八十字以内で説明しなさい。

日本語の臣民に対応する英語の subject は、

|   |
|---|
| X |
|---|

 ということ。

問七 傍線部 E「不協和音を奏でる様々な声」とあるが、この不協和音について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア それまで現人神と信じられていた天皇が突然に「人間宣言」を発したことと、天皇に対する考え方の違いから国民の間に不協和音が生まれた。

イ 天皇が「人間宣言」で臣民との結びつきが信頼と敬愛に基づくものであると一方的に迫ってきたことで、天皇と国民の間に不協和音が生まれた。

ウ 天皇がそれまでの臣民を国民と呼びさらに全国を巡幸したことなどにより、王制下の民主主義が生み出す不協和音が大きくなることはなかった。

エ 民主主義が理想の形として上から与えられたことで人々に生じた不協和音は、一連の天皇から臣民へのアプローチによって大きくなりやすにすんだ。

オ 天皇から何かしてもらうことで安全と繁栄を図るという日本人の受け身的な態度のため、民主主義を受け入れる際にも不協和音が生じることはなかった。



### Ⅲ

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(四五点)

日本人移民のブラジル導入には、<sup>A</sup>複雑でグローバルな要因がからんでいる。ハワイやアメリカ本土への本格的な日本人の渡航は一八八〇年代からはじまる。当時のアメリカへの日本人移民は二つの流れがあった。すなわち、個人としての「書生」の渡米と出稼ぎ労働者であった。書生は、若い独身男性の一時滞在であるのがふつうで、ハワイや西海岸の都市でハウスボーイと呼ばれる家内労働者として働きながら、進んだ知識や技能を学び、日本に帰って立身出世するという夢を描いていた。また、出稼ぎ労働者はサトウキビ農場などで働き、給金を貯めて故郷に錦を飾るのが目的であった。彼らのほとんどはアメリカでの永住の意志は持っていなかったが、何らかの理由で帰国が困難になったりして、滞在期間を延長する者も現れた。二〇世紀はじめにはそういう人びとが増え、またそのころ海外渡航熱も高まり、出稼ぎ希望の渡航者も激増した。俗に「からゆきさん」と呼ばれるような日本人娼婦たちの存在も、近代における日本人の海外渡航や進出を考える場合、無視できない規模の人数と地域的広がりを見せた。

ハワイやメキシコ、カナダを経由してアメリカ本土に入国するいわゆる「転航移民」も加えて、二〇世紀はじめの日本人移民はどんどん増加していった。一九世紀の西部開拓時代に中国人の大量流入により、一八八二年の「排華移民法」によってそれを拒止した経験を持つアメリカ合衆国政府はこの事態に危機感を抱いた。また、安価でよく働く日本人労働者の存在は、米国人労働者の存在をおびやかすようになった。

同時期、人種問題から端を発した黄禍論の流行から、特にハワイやアメリカ西海岸で排日運動がはじまった。これにより、送り出し側の日本はもとより、州や連邦政府単位で、「日本人の移民問題」が議論されるようになった。「サンフランシスコの学童隔離問題」は、当時の動きを示す象徴的事件である。一九〇六年、サンフランシスコ学務局によって、日本人生徒を公立小学校から隔離し、中国人学校に編入させるという決議が下された。この年に起こったサンフランシスコ大地震の影響で学校のスペースが足りなくなってしまったからというのが理由であった。この事態を憂慮した日系移民や総領事館は、抗議運動を展開した。日本本国のマスコミもこの事件に反応し、各地で頻発している日本人経営レストランへのボイコットや日系人襲撃事件なども報告され世論の高まりを見せた。こうして、サンフランシスコという西海岸の一都市で起こった問題は日米間の国際問題にまで発展する。この事態に対する合衆国政府の態度は、公立学校から日本人を締め出すという行為が合衆国憲法や日米通商航海条約などの取り決めに抵触するのではないかと懸念を表明するものであった。結局、当時のアメリカ大統領セオドア・ルーズベルトがサンフランシスコ市に学童隔離の撤回を命じ、一九〇七年日本人生徒は復学を許されることとなる。

これに関連して、ルーズベルト大統領は、一九〇七年三月、大統領令（Executive Order）を発布、ハワイ・メキシコ・カナダからの日本人の転航移民を禁止すると宣言する。日本政府も、この「学董隔離問題」は結局のところ排日世論が先鋭化したものであり、移民送出を制限するしか解決策がないという結論に達した。アメリカにおける日本人移民排斥の動きが日米国家間の問題に直結することを恐れた日本政府は、翌一九〇八年、「日米紳士協約」（Gentleman's Agreement）を合衆国政府との間で結ぶことになる。これは、一般の観光旅行者や学生など以外の日本人にアメリカ行き旅券を発行しないという日本政府の約束であり、それまでの一連の排日運動に対する日本側の自粛措置であった。この日米紳士協約によって、北アメリカには新たな移民を送ることが制限された。

一方、ブラジルではサンパウロ州を中心にモノカルチユラルなコーヒー産業が成長していたが、一八八八年の奴隷解放前後からアフリカ系の奴隷にかわる労働力を求めねばならない背景があった。その代替労働力として、イタリアや旧宗主国ポルトガル、スペインなどからの移民をはじめ多くのヨーロッパ系移民が導入された。一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて、ブラジルへのヨーロッパ移民は増え続けたが、各国政府はブラジルでの劣悪な労働条件から、しだいに移民送出を制限するようになっていた。

こうしたなかで、ブラジルでは一八八九年十一月一五日に共和主義革命が勃発する。帝政が倒れ、皇帝ドン・ペドロ二世はヨーロッパに亡命。同月中に、テオドーロ・ダ・フォンセツカ元帥（初代大統領）を首班とするブラジル合衆共和国（República dos Estados Unidos do Brasil＝一八八九～一九六七の正式国名）が成立する。新政府は、それまで東洋系移民に門戸を閉ざしていた政令第五二八号を廃し、一八九二年一月一五日、法律第九七号をフロリアーノ・ペイシヨット副大統領（後に第二代大統領）が裁可したことによって、新たな展開がもたらされることとなった。一八九五年には、ブラジルは日本と国交を樹立し、一九〇〇年には、サンパウロ州政府は日本人移民にもヨーロッパ移民と同様に補助金下付を決定するのである。

**P** ブラジルでは、一八九二（明治二五）年に中国、主に広東方面から四七五人の中国人移民が導入されている。同年「法律第九七号」が制定され、中国人とともに日本人移民の導入を決定している。<sup>B</sup>ブラジル政府の日本人移民導入の最初の試みであったが、この時は実現にはいたらなかった。ただ、これによって、両国は国交樹立に大きく傾き、パリにおいて交渉が開始された。一八九四（明治二七）年七月に日清戦争が勃発し、いったん交渉は停滞したものの、戦後の一八九五（明治二八）年十一月五日には、日本側全権そねあらすけ曾禰荒助駐仏公使とブラジル側全権ガブリエル・ド・トレド・ピアザ・エ・アルメイダ駐仏公使との間に「日伯修好通商航海条約」がパリで調印された。こうして日本とブラジル間の国交が開始される。こういった外交関係が開かれたことには、サンパウロ州選出の当時の第三代大統領ブルデンテ・デ・モラエスに対する、同州のコーヒー生産者からの

強い要望があったことが指摘されている。一八九七年には、最初の日本人移民たちがブラジルの  
コーヒー農場に送られる計画が持ち上がったが、コーヒー相場暴騰という電報のために中止されて  
いる。このように、日本とブラジルの国交には、コーヒー生産とそれを支える外国人移民労働者の  
導入という構図が、その樹立の時点から条件づけられていた。

その後、二〇世紀に入って、日露戦争（一九〇四～一九〇五年）勃発の影響で、日本では移民送  
出どころではなくなり、再びブラジルへの移民の検討がなされるのは、戦争の終結を待たなければ  
ならなかった。

日露戦争後の不景気や、出征将兵の帰国による労働人口の増大、アメリカへの移民の制限といっ  
たような状況から、もともと理想的な（あるいは少しでもマシな）条件が整った新たな移民送出先  
として選ばれたのが、ブラジル、特にコーヒー生産によって常に契約労働者を必要としていたサン  
パウロ州であった。このように、移民の送出と受入れも、それぞれの国家の国内状況が連動するこ  
とによってはじめて成立する。

ブラジルへの最初の日本人移民は、高知県出身の元自由民権運動の闘士・水野龍<sup>みずのりゅう</sup>（一八五九～  
一九五一）の皇国殖民合資会社によって実施された、一九〇八年の笠戸丸移民一六〇余家族七八一  
名（他に自由渡航者一二名）からはじまるとされる。それ以前に、漂流民や海軍関係者、公使館関  
係者、少数の自由渡航者や商人がいたことが知られているが、近代的で組織的なブラジルへの移民  
がはじまったのは、この笠戸丸移民からと見てよいだろう。ただし、この時期、コーヒーは相変わ  
らずブラジルの主要産品ではありつづけたものの、価格の低下ですでに「金のなる樹」ではなくな  
っていた。

ともかく、一九〇八年四月二八日に神戸港を出航した移民たちは、東シナ海、南シナ海からイン  
ド洋、大西洋を越える五一日間の航海を経て、同年六月一八日、ブラジル第二の商工業都市サンパ  
ウロの外港でありコーヒーの積出港であったサントスに到着したのである。

第一回笠戸丸移民の一人に、後に邦字新聞『聖州新報』を発行することになる日系ジャーナリス  
ムのパイオニア・香山六郎がいた。香山がのちに編述する『移民四十年史』によると、船は六月一  
七日の夜、まずサントス港外に仮停泊して夜明けを待っていた。星の降るような晩だったという。

笠戸丸移民たちの大部分は、サントスから鉄道でセーラ・ド・マール（海岸山脈）を越えて、サ  
ンパウロ市のブラッセル地区にあったサンパウロ州立移民収容所（現在、サンパウロ州立移民博物  
館となっている）に入り、はじめて食べるアロイス・コン・フェージョン（ブラジル産の米に豆の  
スープをあえたもの）や食後に出る「真つ黒でにがい湯」（コーヒー）に度肝を抜かれた。ここで  
数日ないし数週間を過ごした後、各地へ配耕（各耕地へ配置されるために送られることをこう呼  
ぶ）されていった。移民収容所の慣れぬ硬いベッドの上で見たものは、金のなる樹を育て柳行李<sup>やなぎばり</sup>  
にいつぱいの札束をつめて a 夢であつたろうか。

〇  
個々の人間が海外へ移民することを決心する理由、背景については、これもさまざまといわなければならない。

もっとも大きな理由はやはり経済的要因で、不景気により、国内で吸収できなくなった余剰労働力を必要な地域に供給するという、いわゆる「プッシュ・プル理論」にのっとって説明されてきた。これは、移民を扱った従来の社会学や政治学の研究で、送出側の要因（プッシュ要因）と受入れ側の要因（プル要因）に分けて経済的要因から説明する理論である。この理論では、所得の低い地域（南）から所得の多い地域（北）に労働需要を求めて人が移動し、そこでの収入、技能、政治的価値観などを持ち帰ることによっていずれは南北の格差が解消するとされている。

ただ、移民という現象は、「プッシュ・プル理論」では捉えきれない事象や体験をふくんでいる。私は、マクロな世界史的事象からミクロな移民個々人の地域を越えた諸体験に運動性を見出し、そのダイナミズムを把握する歴史観を「運動史観」と呼んだ。「プッシュ・プル理論」はあくまでも、送出国と受入れ国の一方通行的な関係であるが、「運動史観」は二つの国家間の往復的な関係と、さらにグローバルな影響、その影響の個人への波及までを想定する。国家間における移民の送出と受入れも、マクロな世界史的事象とミクロな移民個人個人の諸体験も、こうした運動のなかで捉えようとするものである。

日本の場合に当てはめると、西南戦争（一八七七）後の不景気と紙幣乱発によって起こったインフレのため、農産物価格は一八八〇年から暴落し、土地と生活の手段を失う農民たちが増加したこと、一揆や米騒動などが治安維持の問題にまで拡大したこと、人口増加による余剰労働力の海外志向、庶民の海外知識の増大したこと、などが主なプッシュ要因としてあげられる。「移民イコール食いつめ者」というようなイメージは、この経済的要因から生まれたものであろう。しかし、一八八〇年代以降、こうした「食いつめ者」とは別に、比較的富裕層から洋行や私費留学生といった形での海外渡航やその延長線に移民として他国に居住する者が現れた。「食いつめ者」移民が流行した余波、海外知識の増大の相互波及効果として、性格の異なった移民や渡航者が生まれたのである。ハワイやアメリカ西海岸における日本人移民増大による、邦字新聞の発行やキリスト教、仏教をはじめとする宗教組織の拡大も、そうした運動のなかに位置づけることができる。

一方、ブラジルへの日本人移民の通俗的なイメージをつくりあげる際に、小説やドラマなどマスメディアの果たした役割は大きい。石川達三の『蒼氓』は、

一九三〇年三月八日。

神戸は雨である。細々とけぶる春雨である。海は灰色に霞み、街も朝から夕暮れどきのように暗い。

と、前途に暗雲を感じさせるような書き出しではじまる。石川自身の実際の移民船乗船体験にもとづくこの作品は、一九三五（昭和一〇）年の第一回芥川賞を受賞したことによって広く読まれ、読者に「移民イコール食いつめ者」あるいは「棄民」という海外移民の悲惨なイメージを刻印することとなった。同じ航海をドキュメンタリーとしてレポートした石川の『最近南米往来記』（一九三二）は、当時のブラジルに向う前の国立移民収容所での移民たちの様子や移民船の船内生活を活写する同時代史料といえるが、やはり移民の悲惨なイメージはともなうものの、『蒼氓』よりはドライな視点や描写が見られる。『蒼氓』は文学作品として、日本社会の暗部をさらけ出そうとする意図のもとに作品が構成されている点に注意しなければならない。

戦後では、アマゾン河口のパラ州トメアスーの日本人農民を描いた角田房子『アマゾンの歌』（一九六七）、笠戸丸移民から後に述べる第二次大戦後の勝ち負けの抗争までを描いた北杜夫『輝ける碧き空の下で』（一九八二―一九八六）、TVドラマではNHKドラマ「ハルとナツ」（二〇〇五年放映）などをあげることができるであろう。これらの作品に共通したイメージは、「貧困ゆえの出稼ぎ移民」、あるいは祖国から捨てられた人びと「棄民」というネガティブなものである。また、貧しさや差別を克服しながら生きぬき、家族を守り愛し合う人間の強さやたくましさ、ただかさといったステレオタイプも付随する。確かに、日本で窮して移住を余儀なくされた人びとも多くいただろう。それがプッシュする力として働いたのも事実であろう。あるいは、それぞれの移民のライフヒストリーから、そういう「移民の物語」を読み取ることも可能であろう。しかしながら、<sup>D</sup>これらのイメージはあまりにも悲劇的な面やドラマチックな面に偏りすぎ、研究者だけでなく、当事者である移民の間でも批判の対象になっている。

（根川幸男『移民がつくった街 サンパウロ東洋街——地球の反対側の日本近代』、

一部改変）



問一 傍線部 A「複雑でグローバルな要因」とあるが、日本人移民について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 一八八〇年代に、アメリカ合衆国政府は安価で勤勉な日本人労働者を重視すると同時に、アメリカ本土に流入する中国人の労働者を拒止するようになった。

イ 一八八〇年代以降、日本は欧米諸国さらにはアジア、中南米などの国々と労働者に関する送出・受入れの条約を結んだことで、労働者を送出し続けねばならなかった。

ウ 一九世紀後半以降、ブラジルは奴隷解放に伴う労働力の代替として日本の労働者を必要としたが、当初は労働条件が悪く、日本政府はこれを拒否した。

エ 二〇世紀初頭以降、アメリカ合衆国政府は日本人労働者を積極的に受入れたが、その後、排日世論の高まりと共に、日本人への旅券の発行を停止するようになった。

オ 二〇世紀初頭にアメリカ合衆国政府が日本人労働者の受入れを禁止した際に対象となったのは転航移民のみであり、日本からの直接の移民は含まれなかった。

問二 傍線部 B「ブラジル政府の日本人移民導入」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア ブラジル政府は国内世論を一因として、特にコーヒー生産に従事する日本人移民の導入を決定したが、国交を樹立したばかりの日本政府はこれを受諾しなかった。

イ 帝政の終焉後、ブラジルは日本からの移民の受入れを決定したが、当時の両国の状況から、実際に組織的な移民が始まるには一〇年以上待たねばならなかった。

ウ 笠戸丸に乗船した者はいずれも生活に困窮していたため、ブラジルに到着後、移民審査を受け、すぐにコーヒー園での労働を開始せざるをえなかった。

エ サントスに到着した笠戸丸移民は、皇国殖民合資会社という国からの依頼の色合いが強い移民であったため、現地での生活は国が理想的な条件を保障した。

オ 日露戦争後の日本では、戦地から将兵が戻り国内労働人口が過剰となったことから、アメリカ合衆国よりも条件の良いブラジルへの移民が積極的に行われた。

問三 **P**で示された段落には、ある語が別の語に置き換えられたことで、これ以降の内容にすぐわなくなっている箇所が一つある。その語を二文字で抜き出さなさい。

問四 空欄 **a** に入る言葉を、これより前の本文中から八文字以内で抜き出さなさい。

問五 傍線部C「個々の人間が海外へ移民することを決心する理由、背景」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 西南戦争以後の日本では、農民は所得が低下したため、生活を維持するために海外で働くことを選択肢の一つにせざるをえなくなった。

イ 一八八〇年代以降の日本では、生活手段に困った農民による騒動への罰則の一つとして、ブラジルへの移民政策が決定された。

ウ ハワイやアメリカ本土では、笠戸丸の移民が開始されたことで仏教が拡大しており、後の日本からの移民は安心して生活することができた。

エ ブラジルへの移民を描いた石川達三の小説などは、日本人に海外知識に接し易くさせ、これと同時に移民をブッシュする力にもなった。

オ 二〇世紀以降にブラジルへ移住した日本人は、それ以前の日本人移民とは異なり、特にプル要因に魅力を感じていた。

問六 傍線部D「これらのイメージはあまりにも悲劇的な面やドラマチックな面に偏りすぎ」とあるが、実際の日本人移民はどのような状況であったか。本文中の言葉を用いて、六十字以内で説明しなさい。

問七 次のア～オのうち、本文の内容に合致するものにはa、合致しないものにはbを、それぞれマークしなさい。

ア 一八八〇年代以降の日本からブラジルへの移民の背景を検討する際には、プル要因を考慮する必要はない。

イ 日本からハワイへの移民の理由を説明する場合、所得の少ない送出国と所得の多い受入国という二つの立場のみから考察することに筆者は否定的である。

ウ 一九世紀末のブラジルにおけるコーヒー産業の労働環境は、ヨーロッパ移民にとってはひどかったが、当時の日本移民にとっては本国よりは快適に感じられた。

エ 日本から海外への移民は、時代を問わずほとんどが男性であったため、これまで女性の移民については描かれてこなかった。

オ 二〇世紀初頭にアメリカ合衆国で日本人労働者が問題となった際にも、ハワイから流入する日本人移民は問題視されなかった。